

# 証言の認識論における意味理解の問題

田中 凌 (Ryo Tanaka)

東京大学大学院総合文化研究科

本論の目的は、言語による知識の伝達を問題とする証言の認識論と、語の意味の理解能力を問題とする言語哲学の議論とを適切に接続する、新たなアプローチを提案することである。

他者の証言を受け入れることによって信念を形成する際、その正当化は、証言に含まれる語句の意味を聞き手がどの程度正確かつ特定の理解しているか、ということに影響を受ける (Pollock 2020, 2021; cf. Peet 2019, Hyska 2023)。というのも、証言の内容を正確かつ特定の理解できることは、証言に基づいて形成しようとしている信念と、聞き手がすでに持っている他の信念との整合性を検討する能力に直結するからである。例えば、「ペルシェロン」という特定の種類の馬を意味する語について、それが何らかの動物を指示する語である、という程度にしかその意味を特定の理解していない主体を考えよう (Pollock 2021)。この主体は、この語の意味を十分に特定の仕方で理解していないため、「この動物園にはペルシェロンがいる」という証言が、〈この動物園には馬がいる〉を含意するような内容を持つことを認識できない。したがってこうした主体は、自身が〈この動物園には馬がない〉といった、当該の証言とは相容れない内容を持つ信念をすでに抱いている場合においても、証言の内容と自身の信念体系との間にある齟齬を適切に認識できない。このように、証言に含まれる語の意味理解が不完全であることは、自身のすでに抱いている信念が証言内容に対する阻却要因 (defeater) となっている可能性の把握を妨げるという仕方で、信念形成プロセスの信頼性を低下させる。

こうした議論を経て、自然に生じる問いは次のようなものだろう。ある語  $t$  が含まれる証言を受け入れることによる信念形成が正当化されたものであるために、聞き手は  $t$  の意味をどの程度正確かつ特定の把握していなければならないだろうか。証言の認識論と言葉の意味理解能力についての議論を結びつける上でこうした問いを立てることは自然なアプローチであるが、本論では、最終的にこうした問いは退けられなければならないと主張する。この問いは、上記の事例に見られたような問題がどのような具体的場面においても発生しないことを担保するという意味で十分に一般的であるような意味理解の基準を、それぞれの語について指定できることを前提とするものである。しかし、聞き手に求められる意味理解の具体的な内容は実際のところ文脈によって様々であり、ある語の意味理解に求められるそうした一般的基準を、個々の文脈から完全に独立した形であらかじめ定めることはできない。意味理解能力の特徴づけについての先行研究 (e.g. Heck 1995, Millikan 2010, Williamson 2007) を参照することで Pollock の議論を敷衍し、証言の認識論と意味理解の問題を接続しようとする以上のような「自然な問い」を退けるのが、本発表の第一の目的である。

こうした論点を踏まえた上でさらに本発表では、証言の認識論と意味理解能力についての議論を適切に接続するためには次のような代替アプローチを採るべきであるということを、第二の論点として主張する。このアプローチは、証言の受入れ手として主体に求められる一般的な能力を、個々の具体的な文脈において自身の意味理解が十分に正確で特定のなものかを適切に判断し、それに照らして信念形成プロセスをコントロールするといった、メタ的な能力として特徴づけることを提案する。このアプローチの利点は、語の意味理解に求められる具体的内容が文脈依存的なものであることを認めつつも、証言の受入れ手に対して意味理解という観点から一般に求められる能力はどのように特徴づけられるか、という自然な問題意識を手放さずに済む点にある。こうした考えに基づく提案の詳細を事例に即して描写し、時間が許せば、この提案が聞き手に求めるメタ的な能力を標準的な話者が実際どの程度持っているかという経験的な問題について、先行研究に基づいて検討する (Drożdżowicz 2022)。

### 参考文献

- Drożdżowicz, A. (2022). Making it Precise: Imprecision and Underdetermination in Linguistic Communication. *Synthese*, 200(3), 219.
- Heck, R. (1995). The Sense of Communication. *Mind*, 104(413), 79–106.
- Hyska, M. (2023). Luck and the Value of Communication. *Synthese*, 201 (3): 96.
- Millikan, R. G. (2010). On Knowing the Meaning; With a Coda on Swampman. *Mind*, 119(473), 43–81.
- Peet, A. (2019). Knowledge-Yielding Communication. *Philosophical Studies*, 176(12), 3303–3327.
- Pollock, J. (2020). Context and Communicative Success. In T. Ciecierski & P. Grabarczyk (Eds.), *The Architecture of Context and Context-Sensitivity* (Vol. 103, pp. 245–263). Springer.
- Pollock, J. (2021). Linguistic Understanding and Testimonial Warrant. *Erkenntnis*, 88 (2):457–477.
- Williamson, T. (2007). *The Philosophy of Philosophy*. Blackwell.